

べき見にもあらず、

〔好色五人女^二〕木屑の杉やうじ一寸先の命

亭主の長左衛門、棚より入子鉢をおろすとて、おせんがかしらに取おとし、うるはしき髪の結目たちまちとけて、あるじ是をかなしめば、すこしもくるしからぬ御事と申て、かい角ぐりて、臺所へ出けるを、^略中さては晝も棚から、入子鉢のをつる事も有よ、いたづらなる七ツ鉢め、^略下

〔諸商人世帯氣質^六〕淵の上に鮫魚^{あめのうぎ}擱取の金銀は孝行の徳

淵と思ふ處をさがしけるに、黒きもの山の如く見えければ、一掴み取て上れば、峰より年々流れこんで、堅まりし漆なれば、魚を入れん爲に持來りし、入子鉢へ漆を入れて、鮫^{あま}は葛蔓にて結び提て

立歸り、^略下

以形狀爲年

〔節用集大全^三〕^{器財}鼓鉢^{つみなち}似^似細腰鼓^{之具形}

〔嬉遊笑覽^二器用^下〕寛永發句帳に、たんほ、をあへてやいる、鼓鉢^{直三}立鼓の形したる鉢なるべし

〔節用集大全^二〕^{器財}冑鉢^{かぶと鉢}

〔毛吹草^三〕相摸^{カフ}甲鉢

〔棠大門屋敷^四〕親の心子^{かぶこ}えらす

醬油でからりと煎^{いっ}たくわゐを、甲鉢^{かぶこ鉢}に入れてあがれば、^略下

〔槐記〕享保十一年四月廿一日、御茶、^略中御香物^{アウリ、ナス、ヒ}色付^{三匹}手ノアル鉢^略中御菓子

色^{チマキ}朝^{セン}竹^{ノ子}葉^{青地}小鉢^{水ナハリ}箸付

〔皇都午睡^{三編}〕^中寝た顔して聞ていれば、最前の肴るゐを、戸棚の小鉢^{重鉢}の類に入れて、^略下

〔教草女房形氣^{二十五回}〕引菜^{ひきざい}は約束の鮎^{あゆ}の叉焼肉^{てりやき}、李兵衛が青磁の手鉢^に、タツプリとあり、